



TITLE:

ルドウェル・ムウアの総合経済學 概念

AUTHOR(S):

桑原, 晋

CITATION:

桑原, 晋. ルドウェル・ムウアの総合経済學概念. 經濟論叢 1931, 32(5): 885-893

ISSUE DATE:

1931-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130024>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第五號

第三十二卷

昭和六年五月一日發行

論叢

人稅物稅の分界並に特徵……………法學博士 神戸正雄
人口密度と經濟生活……………經濟學博士 沙見三郎
數學的經濟學の論理的構造の批判……………文學博士 米田庄太郎

說苑

米の生産地と消費地との對立……………經濟學士 谷口吉彦
信用と資本……………經濟學士 中谷實
國勢調査に於ける人口の概念……………經濟學士 岡崎文規

雜錄

都市公企業の財政的意味……………經濟學士 大谷政敬
植民的活動に於ける政治的支配に就いて……………經濟學士 金持一郎
歴史哲學に就いて……………經濟學士 竹中靖一
ルドウエル・ムウアの『綜合經濟學』概念……………經濟學士 桑原晋

法令

地租法・營業收益稅法中改正法律・砂糖消費稅法中改正法律・織物消費稅法中改正法律

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

ルドウエル・ムウアの綜合經濟學概念

桑 原 晋

コロムビア大學ムウア教授の「綜合經濟學」(H. L. Moore, Synthetic Economics, '29)を紹介し度い。本論に入る前に便宜上、著書の目次を列ねて置く。第一章 緒論、第二章 根本概念。第三章 需要法則。第四章 供給法則。第五章 動的均衡。第六章 經濟的動搖。第七章 結論。

一 「綜合經濟學」の意義 「綜合經濟學」は、タ

ルドウエル・ムウアの綜合經濟學概念

イトル・ペーヂに掲げられたモットーに従つて、『多數の非連續的事實を、連續的關係の網の目に變形せしむるところの綜合的統一』をもとめる。

言葉を換へて云へば、Synthetic Economicsと云ふ標題は、相互關係ある凡ての經濟的數量を、聯立的・現實的方程式の綜合に於て現はすところの一方法によりて、動的均衡・動搖・及び長期的變化の具體的・實證的記述を指示せむとするものである。(五頁)

(註) 『私が知る限りでは、ワルラスもバレットも、「綜合經濟學」なる言葉を用ゐなかつた。バレットは、分析的研究に綜合的研究を伴はしむる必要が凡ての科學にあることを強調し、經濟理論の取扱に數學を用ふるに當りてのワルラス及び彼自身の獨特な見地を記述するために「綜合的」と云ふ形容詞を繰返へして用ゐてはゐる、けれども「綜合(的)經濟學」なる纏れる文字は彼の著書には見當らないやうである。バロオネ及びセンシニは偶然に、ワルラス及びバレットの方法を聯立方程式の系列における靜態經濟學全體の表現として記述する際に、「綜合經濟學」なる言葉を用ゐた。

ロオザーヌ學派と全く縁故の無い一人の伊太利經濟學者ロリア教授は、著書の一つの標題として、*La Sintesi Economica*といふ言葉を遣つてゐる。これは形態的には私の

16) W. Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften, 1883, Vorrede. [Gesammelte Schriften, I. S. XVII.]

只今の標題と似てゐるが、實質的には異なる（五一六）。

二 その特性

（イ）交換・生産・資本化・及び分配の Consensus を表現するために、聯立方程式を使用すること。

（ロ）この數學的綜合を、素成問題における凡ての變數が時の函數として取扱はるゝところの經濟動學の中にまで擴張使用すること。

（ハ）この綜合を更に、該方程式に具體的・統計的形態を與ふる點まで擴張すること。

「綜合經濟學」の名に、以上三つの特性を含ましむることによつて、「綜合經濟學」は演繹的並に歸納的となり、動態的・實證的・及び具體的となる。（六）

三 その便益

「經濟的研究における綜合方法の便益は……價格及價格決定要素の全體を統體（ensemble）として取扱ふ綜合方法は、經濟學における多くの論争を追出すこと。研究者をして彼の問題が解決に達せる時を知らしめること。及び經濟生活に合理的豫測及支配を導き入れる希望に對して根據を與へる

ことなど」である（一六三）。

今それらの一つ一つについて敷衍をこゝろみる。

第一の便益。價格及價格決定要素の全部を統體として取扱ふ綜合方法の第一の便益は、現象の原因に関する多くの經濟學上の論争を除去するといふことに就て。

彼は言ふ。「一商品の價值の原因はその生産費であるか又はその限界效用であるか？利率の原因は資本の生産力であるか又は將來財の割引であるか？勞銀率の原因は勞働者の生活標準であるか又は彼の生産物の限界價值であるか？經濟理論の歴史において從來之等の問題は、論客の轉換（改宗）の點まで討議されはしなかつたが、彼等の能力の盡きる點まで論ぜられて來た。それなのに、交換・生産・資本化・及び分配について綜合的見解がとられるとき、吾々はただちに、前記諸問題の二筋道の各々は部分的眞理を含有すると言ふこと、部分的眞理の總計（sum）は全體眞理（whole truth）ではないといふこと、各部分的眞理の適當な重要さと地

位とは一々並べ立てうるといふこと、及び決定する諸條件の統體は數學的に表現し得るといふこと等が分る』(六―七及び一六四)

この便益は、下記第二・第三便益と共に、「動的均衡」の理論(五章)の中にも詳述されてゐるけれども、五十頁に餘る數式計算に據れるその説明を今は割愛しなければならぬ。また、同様の敘述は、經濟的動搖の諸原因に關する理論についてもなされう。

第二の便益。綜合方法の第二の便益、進みて云へば綜合方法の本質的性質の一つは、經濟問題研究者をして問題が己に解決に到達したる時を知らしめることである。

尤も『茲に解決 solution と云ふ言葉は、數學的方法の見地から見るか又は綜合的方法の見地からみるかに従つて、區別されねばならぬ。數學的方法によれば、問題の未知量と同數だけの獨立なる方程式があるときに、問題は解ける。しかしながら、綜合的方法の見地からすれば、これではまだほんの半分だけ解決された

ルドウエル・ムウアの綜合經濟學概念

にすぎぬ、即ち抽象的聯立方程式の呈示の上に更に、それら方程式自身經驗的に獲得されうるといふこと及び、從ひて、問題は現實的解決 (real solution) を許すといふことの證明が供せられなければならぬ』(七)。

この區別に立つてムウアは、マーシャルを引合に出して次の如く批判する。

『マーシャルが「原理」の「數學附錄」の註二十一を、「結合需要・合成需要・結合供給・及び合成供給の問題(それらが凡て一緒に起るとき)の鳥瞰圖」を抱擁するものと考へたことを吾々は知つてゐる。彼は數學的經濟學者として満足してゐるやうに見えた。何となれば、彼は「問題が如何に複雑とならうとも、理論的には確定せることを吾々は知りうる。未知數の數は常に正確に方程式の數に等しいから」と言つてゐるから。マーシャルは、長い丹精の生涯を通じて彼の天分をば、註二十一の抽象的方程式に現實的形態を與へるための努力に捧げた。彼は、綜合的方法の見地から、目的地に到達したであらうか? 註二十一にあらはされてゐる凡ての需要方程式及び凡ての供給方程式は、單に一變數の函數である。マーシャルの著書は、需要方程式も供給方程式も何れも具體的に引張り出す方法を與へてゐない。また、もし方程式を引張り出すための方法が考案されたならば、需

要も供給も、單に一變數だけの函數として、現實問題の取扱に於て有用であるべく十分の正確さを以て表現しうる、といふことを信ずるに足る理由をも與へてゐない。註二十一は、マーシャルが心に抱きし問題の可能的・抽象的な數學的解決であるかもしれぬ。けれども、それは、具體的・實際的解決への有用な第一歩を暗示するものかどうかについて、經濟學者達は意見を異にする。而もその數學的定式化を経験的檢證に委ねるための諸方法が考案されるまでは意見はまづれ當りでしかありえない(三七—三八)。

『綜合經濟學における解決の標準は、綜合化學における標準、換言すれば、既に分析された元素から一化合物を綜合的に再生産すること、同様である。綜合作用は、原本的素成分に關する量的及質的の知識のみならず、綜合の機構及過程に關する量的及質的の知識を含む。經濟學においてはその類推は、誤れる凡ての事物の中から一粒の眞理を哲學的析衷的に認識することとは全く別物である。それは、作用と支配とをそのゴールとしてもつ綜合方法の見地からは、單に實際的無能力にすぎぬ』(一六四)。

第三の便益。綜合方法の第三の、而も更に重要な便

益は、經濟生活の中に合理的豫測及び進んだ支配(rational forecasting and enlightened control)を導入れる希望に對して根據を與へることである。

綜合方法は、價格及び價格限定要素の統體とか、はりをもつ。こゝろみに次のことが假定されると想へ

(八)

(i) 變遷しつゝある社會における需要及供給法則は、經驗的に確めうるといふこと。

(ii) 動的一般均衡を決定する凡ての條件は統計的に言ひ表はしうるといふこと。

(iii) 動的一般均衡を表現する聯立方程式の解決の結果を具體的に知ることは可能であるといふこと。

之等の條件の下では、動的一般均衡における任意の要素を、任意の確定的方法において、變更する結果を合理的に豫見することは可能である。しかし社會生活にありては、特殊的變化の質的量的の結果を豫知することとは、まさしく、進んだ支配の必要條件 sine qua nonをもつことである(九)。

四 その方法 彼の一般的な直接的な論の進め

方は、ワルラスの靜的・假設的均衡の表現より、實際的・動的・一般的均衡の現實的取扱へと移りゆくことであつた。言はばワルラスの方程式の中から一切の非現實的前提を取去ることによりて現實へ接近せしむることであつた。

『經濟的現實界を靜態の明細書によりて置換へた』(二八〇)ところの在來の純粹經濟學の公理・假設・及び規約は、如何にせば理論的なものと現實的なものとを一致せしめるやうに變更しうるか？が當然その際問題となつた。彼は、「絕對的自由競争」といふワルラスの非現實的公理を廢し、靜態の假定を取去り、且つ「絕對的自由競争の假定的制度の下における」均衡と云ふ規約を破棄した。そして之に代はる彼の規約的均衡は吾々の永遠に變化しつゝある經濟において實際に働らく經濟要素が齎らす傾向があるところの一般的均衡である。彼は、この均衡は、變化しつゝある經濟要素の一般的趨勢の線に沿うて起る傾向があると假定する。

ルドウェル・ムウアの綜合經濟學概念

彼は、實業家は、「最大の利潤が得られる」方向にゆくと云ふアリストテレス的事實に賛成して公理とした。(二八一)

而も彼は、ワルラスの方程式より、三群(註一)の實際的函數—實際的需要函數・實際的供給函數・實際的生產係數—が、動的・一般均衡の完全な數學的記述への準備として統計的資料より獲得さるべきである、との暗示を受けた(二二)。

然らば如何にして夫等三群の實際的函數を統計より導出しうるか。このことは、ムウアの「綜合經濟學」概念を理解するためには缺くべからざる地位を占むるのみならず、極言すれば、「綜合經濟學」をして「綜合經濟學」たらしむる存在理由ともならう。し斯くムウアにとりては重要な技術上の問題であるにもかゝらず頁數の都合上この小論には收録出來ない。第一群の誘導方法は「需要法則」の章(四一頁及び六一頁以下)参照。第二群は「供給法則」の章(六九頁及び七五頁以下)参照。第三群は「動的均衡」の章(一一一頁以下)参照。

(註一) 三群の經驗的函數は、嚴密に云へば、(a)商品に對する需要法則。(b)用役の供給法則。(c)信用の供給法則。(d)生産係數。の四群となる。

之等具體的・動態的函數が、ワルラスの假定的・靜態的函數に置換へられるとき、八方程式(註二)の新體系は、(動的均衡の章參照)、動的均衡を決定する。そしてワルラスの靜態的一般均衡をめぐる動搖は、動態的・現實的一般均衡をめぐる具體的動搖の記述に對して役立つこととなる。(一五三)

(註二) (1)商品に對する需要の經驗的函數。(2)用役の供給の經驗的函數。(3)信用の供給の經驗的函數。(4)生産的用役に對する需要と供給との均等を表はす方程式。(5)消費者財の價格とコストとの均等を表はす方程式。(6)生産者財の價格と生産費との均等を表はす方程式。つまり(4)(5)(6)は生産係數。而も(4)は、均衡狀態にありては生産的用役に對する需要はその供給に等し、との假定の上に立ち。(5)(6)は、均衡狀態にありては消費者財の價格及び生産者財の價格は各々その生産費に均等、との假定の上に立つ。(7)新資本財は信用量に等し、信用量は均衡狀態にありては貯蓄量に等しきことを主張す。(8)均衡狀態に在りては、資本財の價格は利子歩合及び保險及減價銷却歩合の總計によりて分割され

た資本財の所得に等しい事實をあらはす。(「動的均衡」の章並びに次章一六三頁乃至一七三頁參照)。

五 その到達點 要するに、動態的に經濟問題を解決すること、及び統計的方法の手段によりて動的均衡・動搖及び長期的變化の理論的觀念に具體的・實際的な形態を與ふことは可能であるか?との問題を提起し。變化しゆく社會における經濟問題の包括的取扱は、經濟的變化の凡ての型の相互依存を認めねばならぬ、そして合理的豫測及び支配に導く取扱の唯一のものとは本性上數學的である、而も經濟的相互關係の統體はその永遠の流れに於て具體的に記述されうるとの確信をもち。多數の非連續的事實——價格と商品及用役の量と——を連續的關係網に變形統一することその標語としたのが彼の「綜合經濟學」である。

ムウアは考へた。なるほどマーシャルは、彼の假定的・靜態的構造が具體的・動態的函數によりて置換へらるゝにあらずむば彼の方法によりて實際問題を解決することは不可能であることを認めた。そしてその要求が提供される方法の發見を探ねはした。しかし前述

のごとく成功しなかつた。彼の一般的均衡論は部分的均衡論で終り、部分的均衡の取扱は假定的・靜的であり而も一變數(單一商品)の函數に限られた。畢竟それは彼の需要及供給法則は、他の事情にして著しき限りと云ふ假定の上に、商品の數量の變化次第で異なる需要價格及供給價格の變化の法則であつて、任意の一商品の數量の變化が他の諸商品の價格に及ばす間接的結果が無視されてゐるからである、と。

又、勿論ワルラスは、マーシャルに反し、一般的經濟的均衡を説明せむとし、價格の組織の凡ての要素間の關係 *liaisons* を知らむと企て、その企てに對する出發點は、需要及供給を、單一價格の函數としてでなしに、凡ての價格の函數として表現したけれども、靜態に於ける「絶對的自由競争」の假定の上に立つところの一般均衡理論は、絶對的自由競争など存在しない又しえないところの永遠に變化しゆく經濟における動的一般均衡を記述するやうには造られえなかつた、と。

もともと純粹經濟學は、現實への第一段の接近のつ

もりで拵らへられた。その第一次的函數は、周倒に定義を下された概念を供給し、相互依存的諸原因の本質を探ね、多數原因の相互作用を發見し、記述し、測定する技術を發見することである。純粹經濟學の第一段の檢證は、その論理的首尾一貫 (logical consistency) である。もし此の檢證が満足されるならば、第二段には、經濟的現實の具體的記述のための土臺として役立つかの嚴重な試練の下に置かれる。於茲ムウアは、新なる規約・假定・及公理を以て出發しつゝ、動的均衡を決定するところの諸條件が何であるかを尋ねる。その探索は、論理的條件と經濟的條件との分離に導く。經驗的要素は、需要法則・供給法則・及び生産係數である。之等凡ては、新なる前提の下では、經驗的に決定する、と。又論理的要素は、新なる公理・新なる假定・及び新なる規約・並びにそれらを演繹的に需要法則・供給法則・及び生産係數に應用したときの論理的結果とである。もしその前提が賢く選ばれ且つ經驗的要素が適當に評價されるならば、理論的構造の論理的首尾一貫

は、經驗的出來事の大凡その瀬度との終局的一致を保證する筈である、と。(一八二)

更に進んで彼は、道德及習慣にまで綜合經濟學的類推を押及ほさむとプロテストする。

即ち曰く『分析と綜合の仕事が、經濟的秩序の社會的諸事實についてなされるとき、研究は、同一方法によりて、これまで主として神話・夢・詭辯を以て接近し來れるところの道德及習慣の問題を考慮する點まで押進められねばならぬ』(一八四—五)。『經濟的商品の變化しつゝある價值を決定する過程と、道德及習慣の變りゆく價值を決定する過程との間には、眞の類似があるか？もしさうした類似があるならば、吾々は冒險に對して勇氣つけられる』(一八五)。『經濟學は、量的局面が extensively に論じつくされるところの社會科學に外ならぬ。その方法—演繹と歸納—は、數物學のそれのごとく、數學的形態をとつてゐる。もし經濟學の初步的概念と、習慣及道德に關する憶説における初步的觀念との間に、眞の類似があるならば、恐らく方法について同様の必要があり、そして綜合經濟學の類推に従つて、習慣及道德を科學として發展せしむることも

可能であるかもしれぬ。この冒險から、價值ある結果を期待することは夢にすぎないだらうか？』(一八六)。

六 讀後感 輪廓をすら満足に描けなかつた手をもどかしく思ひつゝ、拙き繪筆を捨てて。説明の約八割を占むる數式を省略したことは名著を骨抜きにする結果となりはしなかつたか？ (頁數の都合上數式を割愛は紹介者にとりては却つて尠からぬ勢) 紹介すべき肝心の力を捧げしめられたことではあるが。

事實を誤り傳へはしなかつたか？を恐れつゝも、今はそれなりに敢て復た貧しい讀後感を附加へることによりてせめてもの情意を滿さむとする。戸迷でなければ幸である。

『純粹的・數學的經濟學の根本假定—經濟的過程に於ける各要素は極大所得を探求する—は、技術的に「絶對的自由競争」にまでもたらされた』『經濟的現實界は、靜態の明細書によりて置換へられた』『その理論は抽象的であり手にとりがたい』と考へたムウアは、「理論と事實との橋」を架せむと企てた。その橋は、「數學的知識の進歩と統計的材料の豊富と」を要求した。その際に於ける彼の教訓は、「發見せむと欲するならば殘基 (residues) を見よ」と云ふ化學研究の原理であ

つた。「他の事情にして著しき限り」と云ふマーシャルの假定は許されなかつた。『部分的眞理の總計は全眞理を構成しない』といふことを何度も繰返へしてさへ述べなくてはならなかつた。『分析は窮局綜合によりて正常化されねばならなかつた』。

畢竟、彼の言はむとするところは、純粹又は理經濟學者の所謂確^{サティンテイズ}實性は、實際的に有用であるかもしれすなにかもしれぬ、何となれば純粹經濟學者の直接の到達點は、自己の公理・假定・及び規約との論理的首尾一貫の意味における眞理であるから。「確實」は、堆積されゆく假設の挿入によりて「現實」から益々かけはなれるかもしれぬといふ危険があるから(一七九)。即ち純粹理論にありては、implicitly には眞理の標準は、確然と形式化された公理・假設・及規約との論理的一致であるけれども、explicitly には純粹經濟學者として、吾々は道しるべとして、經驗的實在に眼を向けることを要求する、と。(一八一)

勿論それらのことは正しい。純粹又は數學的經濟學者の考慮すべき點を多分に含むことも稱揚しなければならぬ。しかしながら、理論的眞理と經驗的眞理との一致の問題を、一般均衡の靜態理論について考ふると

き、果して吾々は單に『層氣構を追ひ求めてゐたことを遺憾乍ら告白しなければならぬ』だらうか？單なる理論的極樂(theoretical Elysium)の仙境へ導く』ことだけに盡きたらうか？認識の手段として理想型としての靜態を想定することの學問的意義は失れたのであらうか？從つて殆ど凡て現實にはそのまゝ、實現せざる理想的概念を以て滿さるゝ、理論經濟學の *raison bête* は失はれるのであらうか？限られ切つた人間の認識能力の目やすとすべきところは何處に在るであらうか？ワルラスの態度は單に「隱遁者の精神」に過ぎなかつたらうか？その勞作は單に「雪隠哲學」の汚名そのものであつたであらうか？

ムウアに於て、『ワルラスの靜態的一般均衡をめぐる動搖の分析は、動態的・現實的一般均衡をめぐる具體的動搖の記述に役立つ』ことはそもそも何を意味するのであらうか？

方法論的に多くの根本的な問題を孕み且つ暗示するムウアの「綜合經濟學」も、尠くとも只今のわたくしの立場からは一個の未知數として大きく残る。

—六・二・七一